

大阪在任期におけるニコライ・ネフスキーの一側面

——書簡類から見た居住地と交友——

若 松 博 恵

はじめに

西夏学・言語学・民俗学・民族学など幅広い研究成果を残した著名なロシアの東洋学者ニコライ・アレキサンドロヴィッチ・ネフスキー（一八九二年～一九三七年）は、一九二二年（大正一一）四月から一九二九年（昭和四）八月までの七年四ヶ月間、大阪外国語学校露語部（現在の大阪外国語大学ロシア語学科）の教師を勤め、その間大阪に在住していた。^①この期間の動向については加藤九祚氏の『天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』（以下、『天の蛇』とする）に詳しく記されている。^②ただ、刊行後二十六年の歳月が経過しており、この間における新資料の確認や諸研究によって、未記住所を含め補訂されうる状況をなしてきた。

大阪在任期の住居や交友などを知る手立てとしては、先ず彼に関する

る書簡類（封書・はがきなど）を上げることができる。現段階で知られている彼宛の書簡類の大半は、天理大学附属天理図書館に所蔵されているネフスキー関係の資料（以下、「ネフスキー文書」とする）の中にある。^③また、大阪外国語大学附属図書館には、彼または夫人（イソ・磯子・萬谷旭輦）が石浜純太郎に送った書簡類が保管されている。後者については、彼の旅行先（那覇・札幌・東京・台湾など）や帰国時（敦賀・モスクワ・レニングラードなど）のものおよび夫人の東京転居後のものには各住所などが記されていたが、大阪在居時に送られた書簡類——年賀状を含む——には名だけで住所を明記したものは残念ながら見られなかった。^④

そこで、「ネフスキー文書」内の彼宛の日本人からの書簡類のうち、大阪在任期の住所を記したものを中心に、居住地と内容などからこの

間の彼の動向の一端を概観してみたいと思う。

「ネフスキー文書」内の書簡類

ネフスキーの在阪期の居住地について、加藤氏は「ネフスキーは大坂で四度移転した。すべて布施一帯であつた」としている⁵⁾。しかし後述していくように、五度転居し、その場所も現在の大阪市天王寺区、東大阪市客坊付近（瓢箪山）、大阪市生野区東北部（布施駅近隣）と散在していた。

「ネフスキー文書」内の大阪在任期における日本人からの書簡類を見てみると、大阪外国語学校宛のもの（初代校長中目覚が中国から送ってきた絵はがき、伊波普猷からの絵はがき―後述―など）⁶⁾ 以外の八通（資料A～F3）から六カ所の異なる住所表示を確認することができた。それを消印・日付・内容などから年代順に記し、検証していくことにしよう（書簡内容などの解説不明字は、□とした）。

資料A 末吉安恭からの封書 縦封筒、巻手紙内在、いずれも墨書・

縦書き。

封筒 表 切手、消印―那覇 11・9・13 など

大阪市外天王寺村天王寺西万所六一六八

ネフスキー様

裏 沖縄県那覇市松山町一丁目十一番地

末吉安恭

巻手紙―内容―

拝啓 手紙拝受候なり 昨八月卅日午前中御帰宅の由 相変らず
御研究のこと存しる

御申越のおもろに出てたるあやこの儀 早速書校の御報申上候
右はおもろ御艸紙の第四卷あを（お）りやへさすかさのおもろ御
さうし第□頁に出づ

きこへさしかさ（以下四歌 省略―筆者）

いふ語も出づれば あやこををどりと証しあり 又あそびなど踊
の意におもろでも使ひ居りしことが知れやをみしれば 昔は宮古
のみならず本島にもありしと覚え申候

右貴急を得申す也。

早々

末吉安恭

ネフスキー学

消印にある「11・9・13」の11はやや不鮮明だが、大正十一年九月十三日と思われる。内容からしてこの年の七月後半から八月末にかけて実施した（七月二十日那覇、八月三十日帰宅）最初の宮古島調査旅行の際、沖縄で会った末吉安恭に送った書簡に対する返信の手紙である。末吉は伊波普猷からも将来を期待された研究者であったが、一九二四年（大正十三年）に死去している⁷⁾。

この住所については外務省外交資料館所蔵の秘密文書「外秘四〇二〇五号（大正十年七月十七日付）」に「露国人 大阪外国語学校講師 ニコライ・ネフスキー」として、その住所を「大阪府東成郡天王寺村 一一六八番地」とあるのと、ほぼ合致している。地番の相違については現在のところ明確にしがたいが、在阪当初は大阪外国語学校にほど近い場所に住んでいたことになる。

加藤氏は後記する瓢箪山の家（資料B）を最初としている⁸。これは後年（一九二三年―大正一二）、ネフスキー宅にお手伝い（女中）としてやってきた夫人の妹・ミサの記憶と、大阪外国語学校（大学）が天王寺区にあったこと（現在は箕面市粟生間谷八丁目）が念頭にあって、この住所を考慮しなかったものと思われる。しかし、この時期の学校の住所は「大阪市東区上本町八丁目一八七番地」で（当時は東区、一九二五年―大正一四に天王寺区に変更）、上記の住所はネフスキーの大阪における最初の居住場所である。

このことはこの年の六月（日は不明）、イソ夫人に、宮古島への調査旅行に随伴を頼んだ上運天（稲村）賢敷——当時、東京高等師範学校在学——を天王寺公園に迎えに行かせたという⁹ことも理解できる。

B以下なら大阪駅または各家の最寄りの駅——大阪電気軌道（現・近鉄奈良線）の瓢箪山駅・布施駅——などにしたと思われるからである。

本住所の天王寺村は一八八九年（明治二二）四月の町村制施行によって阿倍野村（現・阿倍野区）と合併して成立したもので、一八九七年（明治三〇）の大阪市第一次市域拡張のおり北半分は東区となったが

村は存続していた。一九二五年の大阪市第二次市域拡張でこの北半分などと南区の一部を合わせて天王寺区（第一天王寺区）が成立して村は解消した——さらに、一九四三年（昭和一八）の二二区制による第二天王寺区で区域の調整・移動が行なわれ、現在に至っている——。すなわち、ネフスキーの居住地はこの時期大阪市外であった。

宮古方言の研究は、すでに小樽在任期に上京したおりから手をつけており¹⁰、来阪以前から同島への調査旅行は考えていたのであろう。しかし今回以降、現地調査を実施することによって、本格的に宮古の方言・民俗研究を行なっていくことになり、一九二六年（大正一五）、一九二八年（昭和三）の各夏にも赴き、計三回の調査を実施している。これらの成果は『民族』などの諸雑誌に寄稿したり（その大半は『月と不死』所載¹¹）、研究会で発表し¹²、死後には遺稿資料をもとに『宮古のフォークロア』が編纂されている¹³。

それとともに、すでに西夏語研究に触手を動かしかけていたことは、宮古島渡島途中の那覇から石浜純太郎宛に送られたはがきに「く序でに、お暇が御座いましたら西夏語の本の事を文求堂へ聞いて下さいませんか。お願ひ致します。」とあることから窺える¹⁴。

資料B 本山桂川からの絵はがき 縦書き。

表 切手 消印―那覇 12・12・19 など

大阪府中河内郡牧岡南村字客坊

ニコライ・ネフスキー様

裏 女性写真―(沖繩風俗) 琉球美人―と印字―

―内容―

那覇に来て先ずくりふねを見るのでうれし、島のミヤミヤ見るのはなほうれし

桂川

消印の12(2の下不鮮明)・12・19は、大正十二年十二月十九日と思われる。裏―絵面に上記の内容がインク字で五行にわたって縦書きされている。

「桂川」は本山桂川で、この年の暮から翌年の春にかけて沖繩、とくに与那国島で民俗調査を行ない、与那国島渡島前に那覇から送られてきたものである。この時の調査成果は、炉辺叢書の一冊、『与那国島図誌』として一九二五年に郷土研究社から刊行されている。¹⁵⁾

本住所の「牧岡南村」は「牧岡南村」で、一八八九年四月、河内村(喜里川・五条・客坊)に四条、六万寺、横小路の各村が加わって成立し、ネフスキーが帰国した一九二九年四月には池島村と合併して縄手村となり、消滅している。また、「字客坊」は近鉄瓢箪山駅の北東部一带に広がる現在の客坊町がそれにあたる。地番は記されておらず、当時は家数も少なく字だけで郵便物は届いたと思われる。

この家について『天の蛇』には、

最初は瓢箪山の通称中村別荘という雨戸が四八枚もある大きな屋

敷で、玄関を入ると四〇個あまりの敷石がつらねてあり、庭内には鯉のいる池があった。この家賃は、ミサの記憶によると四五円であった。ネフスキー夫妻はここでオレスト・プレトネルと一緒に住んでいた。

とあり、¹⁶⁾また、「ネフスキー夫妻の悲劇」にもミサの話として、

大阪では中村別荘という塀をまわした、とても大きな家を借りていました。庭は植木屋さんが四・五人で四日もかかる広さでした。

プリチネ(プレトネル―筆者)さんという先生も、日本の奥さんをもらうまで二年ほど同居していました。家賃は四十五円でしたが、とも記してある。¹⁷⁾この時期、ネフスキーと同居していたオレスト・ド・プレトネルが大阪外国語学校露語部の教師になったのは一九二三年四月からで、¹⁸⁾その後には当地に移転していたものと考えられる。そのため、同年の五月に女中として来阪したミサの記憶の中には天王寺村の家(資料A)はなかったと思われる。加藤氏がここを「最初」としたのもミサの記憶によるもので(ミサにとっては最初であるが、「布施の瓢箪山」としているのも、後の腹見町の家(資料C・F3)――最寄りの駅は布施駅――と混同している。

この家からの転居について『天と蛇』には、

ネフスキー一家は、中村別荘で、泥棒にはいられたのを機会に、プレトネルとは別れて、わりあい近くの新しい洋館に移った。家賃は八十円であった。ところがここは周囲が騒々しく、勉強の邪魔になるというので、まわりが水田になっていた腹見町の古い大きな家に引っ越した。

とある。⁽¹⁹⁾そして、ネフスキーの転居後にこの家に引っ越してきたのが、錦野はま一家であった。⁽²⁰⁾

次の移転先については、資料Cの家の前に、資料Bの家にほど近い——瓢箪山付近——「新しい洋館」にいたことになっている。これについては短期間であり、資料も乏しく、現時点では不明と言わざるをえない。瓢箪山付近で二カ所移転していたとすれば、大阪在任期の家はもう一ヶ所増えることになる。⁽²¹⁾

資料C 金田一京助からのがき 官製はがき 縦書き。

表 大阪市東成区小路小瀬(宮址)

ネフスキー様

東京杉並区大字成宗三三二

金田一京助

裏—内容—

この夏沖繩の方へおでかけになるさうですね。コポアヌから、誰も今折あしくアイヌ語の出来るもので女中に行くといふものが

ないが、わたしでもよければネフスキーさんの所へ行くこと云つて来ましたけれど、コポアヌではいけませんか。媼さんだけは出かけたさうです。ゆきもみどりも智をとつて村を出れないといふのです。本人たちは来たさうですけれど、あとはどうも出かけるといふものがないさうです。⁽²¹⁾

文面に日付はなく、消印も押されておらず(裏面に別書簡におされた消印のインクの一部が付着しており、郵便局の押し忘れ)、年月日は不詳である。

本はがきは、ネフスキーが金田一に宛、アイヌ語のできる女性を女中として雇いたい旨(それには夏に沖繩へ行くことも記していたのである)の書簡を出したことに對する返書である。内容に関して興味深いのは、『アイヌ・フォークロア』にあるネフスキーの採集したユーカラのうち「22・樹々の精霊」と「23・娘と魔神」が、「一九二三年一月二九日」と「一九二三年三月一六日」に、「大阪でユキより筆録」と記されていることである。⁽²²⁾加藤氏はこのことを記しながらも、ユキが一九二二年に帰ったとし、本はがきをそれ以降のものとのみ記している。⁽²³⁾ユキは一九二三年の春まで居て、五月には東京の金田一のもとに寄寓しており、その月にミサが女中としてネフスキー家にやってきている。

はがきの差し出された時期を知る手掛かりとしては、金田一が杉並区成宗に引っ越したのが一九二五年の二月であり、⁽²⁴⁾その年の四月に東

成区が成立していることである。小路は一八八九年に旧の中川・大友・腹見・片江が合併した村で、区制施行当初は小路の名は残っていたが、同年のうちに元の四村名が町名となり、一端消滅している。このときの小路は、現在の生野区の東北部（現在の中川西から小路東一帯）にあたる。生野区は一九四三年に東成区から分かれた区で、ネフスキーの在住時は東成区であった。小路は旧腹見村の一部で、宮址は素盞鳴尊を祭神とした八剣神社（一九〇九年——明治四二——に大友の小路神社——現・清見原神社——に合祀された）のあった「宮後」と考えられる。

「東成区小路」は、一九二五年四月からの一時期のみ使用されていた地名であり、文面に「この夏は沖繩の方へお出かけになるさうですね」とあることから、このはがきは一九二五年の四月から初夏にかけてのものということになる。

結果的にはコポアヌが来た形跡はなく、アイヌ語、ユーカラの筆録はなされることはなかったようであり、この年の夏は西夏語の資料を求めるなど中国へ旅行し、沖繩へ行くこともなかった。

「小瀬」は資料Eに「腹見町小瀬」とあり、上記のように一九二五年内に小路から分割されたひとつが腹見町であり、同一場所を示している。資料Dの「腹見町四五〇」はその地番表示で、これも同一場所と考えられる。

資料D 高橋盛孝からのはがき 官製はがき、縦書き。

表 消印15・6・28 など1

大阪市東成区腹見町四五〇

ネフスキー先生

静岡市外安東村大岩一五六

高橋盛孝

裏1内容1

拜啓誠に御無沙汰致して居り候、皆様（ます子も）御変り無之候にや、此夏はいづれかに御出にや、小生七月十日より十日間ばかり京都（西大谷宏山寺にて）に滞在し図書館へ通ひ又先生方に御目にかゝりたくと存じ居り候、一度その間に御邪魔致し度く候へ共御都合如何にや、御聞せ下さらば幸甚に御座候。

消印から大正十五年六月二十九日に、後にネフスキーや石浜純太郎などととも「静安学社」幹事になった高橋盛孝からのはがきである。高橋は東京大学文学部卒業後、京都大学大学院に籍を置いて、ネフスキーのロシア語の授業を受講した教え子でもある。この時は静岡にいたが、一九二七年（昭和二）からは関西大学に勤務することになり、関西にやって来ることになる。

ネフスキーは一九二二年から帰国する年まで、毎週土曜日に京都大学でロシア語の授業を続けた。それには高橋のほか、石田英一郎・田村実造などが受講しており、大学では狩野直喜・内藤湖南・小川琢治などとも親交を結び、研究会などの集会にも参加し、関連書誌に論文

(主として西夏語関連)を寄稿している。

腹見町という町名は今はなく(一九二五年〜一九三九年に存在)、現在の生野区小橋東一〜六丁目にあたる。この町は東大阪市に隣接した地域であり、最寄りの駅は近鉄(大阪電気軌道)の布施駅であった。

このことは行政区画上「大阪市」に属していたにもかかわらず、加藤氏が「布施一帯」⁽²⁸⁾、当時ネフスキー宅を訪れた石田英一郎が「大軌沿線の布施にあつた」と記していることから窺える。

ネフスキーと夫人との間には当時まだ子はなく、文面に記されている「ます子」は、ネフスキーが可愛がっていたペットのポケットザルの名(マシコとも)で、彼が帰国した秋まで生きていたといわれている⁽³⁰⁾。

資料E 岡村千秋からの封書 縦封筒、便箋内在、いずれも縦書き。

封筒表 切手 消印 不鮮明

大阪市東成区腹見町小瀬

ネフスキー様

裏 東京市小石川区茗荷谷町五十二番地

郷土研究社

振替口座東京二三九一七番

岡村千秋

大正十五年十一月六日

(姓名と年月日の数字のみ墨書、他は印刷)

便箋 1 内容

拝啓、過日は手紙で松本重彦氏へ民族論文を執筆下さる様に勤め方御願致して置きましたが、本日柳田に又面会の□□、□□のこととの事と申しき、も一度松本様への伝言をお願い申します。

論題は何なりともかまひません。当民族を御覧になっていないやうでしたら直ぐ御送本致します。

どうかよろしく御取次を御願ひ申します。

十一月十六日夜

岡村千秋 拝

ネフスキー様 侍史

これは大正十五年十一月十六日付で、雑誌『民族』の編輯者・岡村千秋からの手紙である。『民族』は、柳田国男が『郷土研究』廃刊後、岡正雄・石田幹之助などを参画させ、一九二五年から一九二九年まで、二二号を刊行した人類学の総合雑誌である。ネフスキーも「あやこの研究二篇」「あやこの研究」「宮古子供遊戯資料」「月と不死」など宮古島の調査成果を中心に寄稿しており、深い繋がりをもっていた。文面から、先に岡村がネフスキーに、松本重彦へ『民族』に寄稿してもらうように依頼し、柳田に面会したのちに再度仲介を願ったものと思われる。しかし、その後の『民族』に松本の論文は掲載されおらず、実現しなかったようである。

この住所は、ネフスキーが当時東京に在住していた東恩納寛惇に

送った書簡（日付不明）にも記されている³²。また、この家について『天と蛇』に、

「まわりが水田になっていた腹見町の古い大きな家に引っ越した。この付近は蛇が多く、夏の雨上がりなどには四〇匹もの蛇がはいまわっていた。くなにしろ田んぼの中の屋敷は、広くてさびしいだけでなく、蚊にも悩まされた。便所に入るにも蚊取り線香を持参しなければならなかった。

とあり、³³ 当時は人家から離れた所であったようである。これは明記されていないが、ミサの記憶によるものであろう。

資料F 1 夫人からの封書 1 横封筒、横書き。便箋四枚内在。

封筒表 受取日の印 台北 2・7・20 など

台湾台北中央郵便局留置

ネフスキー様

裏 大阪市東成区腹見町四一二

萬谷旭輦

便箋四枚、縦書き 内容（1〜4 筆者） 1

1 今度はどこまでいらした事かとおもひながら、海上の平安を祈りつつこの手紙を書きます。長いお手紙を差上げたいのですけれど、とにかく報告書の事だけ先きに御送り致しました。そして後で又ゆつくり申上げませう。では御きげんようね。サヨナラ。

2 蕃族調査報告書

阿眉族奇蜜社 // 大巴壠社 // 馬太鞍社 // 海岸蕃
紗績族霧社蕃 // 韜佗蕃 // 卓犖 // 大魯閣 // 韜賽 // 木瓜 //

3 蕃族調査報告書（大久族前篇）

大崙蕃 合歡 // 馬利古灣 // 北勢 // 南勢 // 白狗 // 司加耶武（// 欠 1 筆者） 沙拉茅 // 萬大 // 眉原 // 南灣 // 溪頭 //

4 調査報告書

阿眉族南勢蕃 馬蘭社
卑南族卑南社

台湾宗教調査報告書

// 蕃族志

蕃族慣習調査報告書第一卷 // 第二卷 // 第三卷

（報告書名および項目はすべて簡条書き）

この文面の1は、すでに『天の蛇』（二八八〜一八九頁）に掲載されている。2〜4の蕃族調査報告書の正式名は『臨時台湾旧慣習調査会第一部蕃族調査報告書』で、私見による限り一九一三年から一九二一年までに八冊刊行されており、そのうちの四冊が記されていることになる³⁴。

当時研究していた宮古島の方言・民俗の關係で、その南方との比較をも考え、台湾原住民の曹族の調査に行ったものと思われる。この調

査旅行は大阪外国語大学の同僚で、ともに静安学社の幹事でもある浅井恵倫と台湾に赴き、同島到着後別れて単身、曹族の村に入った。このときの調査成果は、ソビエト帰国後の一九三五年、『曹族言語資料』として唯一生前に刊行されている。

今度の家は、まわりにやや人家のある場所であつたらしく、『天の蛇』に「その後、蛇の多い田んぼの中の屋敷から、同じく腹見町の少しにぎやかな四一二番地に引越した」とあり、この家がネフスキーにとつての日本における最後の住居となつた。

この年の十月十七日付で、小樽在任期に精力的に研究していたオシラ様の共同研究者であつた佐々木喜善からも書簡が送られてきている。³⁶ネフスキーのオシラ様研究は、柳田国男をして高く評価せしめられており、生前にまとめられることはなかったが、柳田の「大白神考」や「ネフスキー文書」の便箋複写簿の書翰控の翻刻「ニコライ・A・ネフスキー書翰翻刻―オシラ様研究をめぐって―」(一)(二)がある。³⁷

資料F2 夫人からの封書2 横封筒、便箋内在、横書き。

封筒表 切手 消印―3・8・2 など

沖繩宮古郡平良町平良警察署気付

ネフスキー様

裏 大阪市東成区腹見町四一二

萬谷旭輦

便箋―内容―

今はまだ船の中でございませうと存じます。出立の時にあまり急いだ為時計をお忘れになりましたが、今日洋服を小包で平良警察署気付として御送り致しておきましたからその中へ時計も一緒に入れておきました。

あなたが御立ちになつてすぐ後へコルパクさんが御見えになりました、今私の宅の二階に居ります。＼すぐに東京へ立つ積りで来たのですが、ネフスキーさんに御目にかからない内は立たれませんから、ネフスキーさんがかへるまで私をここに居ります。＼といつて居りますから、どうぞ早く御かへり下さいませ。どうしてもあなたにお目にかからないうちは東京へ立たれないさうです。昨日シュツキさんもいらしてくれまして大阪見物に出かけたところ、道路にレブラ患者のキタナイ人間がゐたのや他にいろいろな事ですつかり気持を悪くしてかへつて来ました。そこでコンラド先生やコルパクチが怒つても笑つても大阪へ出ないと申して居ります。それから昨夜柳田様から原稿を送ってくれといふ電報が参りましたから、あなたが宮古島へ旅行したと返電致して置きました。ネリ子は相変わらずかわいく丈夫です。コルパクチさんも随分大きな赤ちゃんといひました。御土産にお人形をいただきます。では御気をつけてね。早くおかへり下さい。サヨナラ。

この文面もすでに『天の蛇』(一八五―一八六頁)に掲載されているが、昨年の十一月に実見。封筒には「受取人ハ八月十八日ノ奉天丸便

ニテ那覇向出発セリ」と記された付箋が貼られており、返送されたようである。文面からは、来日していたロシア人（コルバクチャー日本語、シュツキー中国学、コンラドー日本学・東洋学）などが多く出入りしていたことや柳田国男との関係が窺える。そして、この住居におけるネフスキー（夫妻）にとつての大きな出来事は、文の後半に見える「ネリ子」、すなわち、娘のエレーナ（ネリ）が誕生したことであろう。これについては、萬谷の戸籍簿のエレーナの項に、

母萬谷イソ私生子、恵蓮、昭和三年五月三日生、大阪市東成区腹見町四百十二番地ニ於テ私生子トシテ出生、母萬谷イソ届出、昭和三年五月十六日受付入籍、母萬谷イソ昭和四年六月十二日兵庫県神戸総領事館内露西亜国人ニコライ・アレキサンドロヴィチ・ネフスキー婚姻ノ際携帶ニ因リ国籍喪失、戸主萬谷幸八郎届出、昭和五年八月二十七日受付除籍。

と記されており、³⁸その後の状況も窺えよう。

資料F3 石浜純太郎からのながき 官製ながき 縦書き。

表 消印 住吉 3・10・2 后1・8

大阪市東成区腹見町四一二

ニコライ・ネフスキー先生

住吉区千躰町一四

石濱純太郎

裏内容

他の二つの聖人云 その経も西蔵訳からの重訳です。あれは二つともPañcārāṅgaの中の二つの漢文本もありますが異本で稍々合しません。皆西蔵文を写して貰うつもりです。漢文本に施護訳守護大千国大経、宝思惟訳随求即陀羅尼経（不空訳の大随求陀羅尼経の異訳です。共に大正の密教部三にあります。）が近い。

石浜純太郎は西夏語をはじめ東洋学者として著名であるが、ネフスキーとの関係でいえば、彼をして世界的東洋学者ならしめた西夏語研究へ導いた（煽動した）人物であり、在阪期から帰国直後にかけて協力し合い、単独または共同で研究報告や論文を発表している。³⁹ネフスキーはその後、精神的に研究をつづけたが、生前に著書としてまとめられることはなく、彼の遺稿資料をもとに一九六〇年、『西夏語文献学』二巻が刊行された。

この年には、外国語学校宛に、沖繩学の父・伊波普猷からはながき送られてきている。

追加資料 伊波普猷からの絵ながき 縦書き。

大阪市 外国語学校

ネフスキー様

東京市小石川区戸崎町十二一八

伊波普猷

文面「内容」

私は昨年の九月下旬布哇及北米に旅行して今年の二月上旬に帰りました。布哇で私に戈界漫遊をさせる人があって来年の五月頃ロシアを経てヨーロッパに入りフィンランド、スエーデン、ノルエー、デンマルク、ドイツ、イタリー、ギリシヤをまわり、フランスに暫く居てから英国に渡り、北米を見て来るつもりです。ポリヴノフ先生のアドレスをお知らせ下さい。又巴利滞在中の日本語の達者なあなたの友人のアドレスも知して下さい。そして紹介状を書いて下さい。

六月十一日 早々

絵面に「サンフランシスコ美術館の玄関前のロダンの「考える人」の下で撮ったものです。」とあり、「考える人」の斜め前に立つ伊波普猷の写真をはがきにしたものである。^⑩

加藤氏は「ネフスキー文書」に、「伊波からネフスキーにあてた葉書が一枚残っている。ハワイから出したもので、パリ在住のエリセエフの住所を教えて欲しいと依頼している」と記している。^⑪しかし、上記のはがきは帰国後の一九二九年六月十一日付で東京から出されたものであり、重複する内容もあるが、エリセエフの名もなく、別葉か、加藤氏の記憶違いと思われる。

ネフスキーからの返信は明らかではないが、伊波の年譜などを見て

も、一九三〇年（昭和五）に上記の内容の世界旅行をした記述はなく、結果的には実現しなかったようである。

まとめ

彼は一九二九年九月に帰国することになるが、帰国したい気持ちはかなり以前から持ち続けていたようである。在阪期間中の前半期にも、母校のレニングラード大学（ペテルブルグ大学）への働きかけを怠っておらず、外交史料館蔵の秘密文書「外秘一七二九七号 大正十四年十一月二十日付」に、四百ページにも及ぶ原稿や日本で購入した書籍を送付したことが記されている。

今回紹介した書簡類などから、ネフスキーは大阪在任期の約七年間に、五回転居したことが確認できた。当初は勤務地にほど近い天王寺村に住まいし、枚岡南村客坊（瓢箪山）付近で二回、そして東成区腹見町（布施近辺）で二回ということになる。このように五回もの引越しが行なわれた背景は、泥棒に入られたための移転、騒々しく勉強の邪魔になるための転居など、彼の極めてデリケートな性格によるものと考えられる。

また、これらの書簡類からは、彼の研究がアイヌ語（ユーカラ）の筆録、宮古島の方言・民俗、曹族語、西夏語（そしてオシラ様）と種々の領域に及んでいることも知れる。在阪期間のほとんどの年の夏休みに調査旅行Ⅱ主としてフィールドワークⅡを実施して（一九二二年・二六年・二八年―宮古島、一九二五年―中国、一九二七年―台湾）、

それぞれの研究を極めて精力的に行ない、各分野の関係者との間Ⅱ交友をみたいせつにしていたことが窺える。

拙稿では、書簡類から、ネフスキーの在阪期における動向の一端（居住地と交友など）を垣間見た。成稿にあたっては、加藤氏の労作『天の蛇』と（引用文など、その出所を明確にするため、煩雑ではあるが「注」などに相当箇所を記した）、天理大学附属天理図書館の河合忠信氏の御配慮によるところが大きい。記して感謝の意を表する。

- (1) 拙稿「ニコライ・ネフスキーと東大阪―その追跡の前提―」『あした』第四号 河内郷土サークル 二〇〇二年に、ネフスキーの人・学問および在阪期の概要を記しておいた、参照を願う。
- (2) 河出書房新社 一九七六年、特に「第七章 大阪在住時代」「第八章 西夏語の研究」。
- (3) 二〇〇二年一月二十九日および七月八日に閲覧。
- (4) 二〇〇一年十一月二十九日閲覧。
- (5) 『天の蛇』、二一五頁。
- (6) 他に、国仲寛徒、長谷川金蔵などからのものがあった。
- (7) 伊波普猷「嗚呼末吉君」『伊波普猷全集』第十卷、平凡社、一九七六年。
- (8) 『天の蛇』、二一五頁。
- (9) 同上、一四八頁。
- (10) 一九二二年（大正一一）の暮から翌年の正月に上京したとき、上運天賢敷から宮古方言を聞き、物語を書き取っている。『天の蛇』、一三三―一三四頁。
- (11) 岡正雄編、東洋文庫一八五、平凡社、一九七一年。
- (12) 一九二三年（大正一二）二月十六日、京都大学史学研究会で「宮古島の結婚と祭礼」を発表。内容は小川琢治抄録として『地球』第一巻第三号掲載。『天の蛇』、一六一―一六八頁に再録。
- (13) ニコライ・ネフスキー著、グロムコフスカヤ編、一九七八年。邦訳、狩

俣繁久・渡久山由紀子・高江洲頼子・玉城政美・濱川真砂・支倉隆子共訳、琉球叢書3、砂子屋書房、一九九八年。

- (14) 「那覇植原旅館より ねふすき 七月廿日」として、文面はロシア語、英語・ローマ字・日本語を取り混ぜている。加藤氏解説による『天の蛇』、一四八頁、二〇〇一年一月実見し、一部改変。「今日やっとな覇に着きました。宮古へ行く汽船の出るまで五日ばかり待たねばなりません。おわかりですか。今は何をしてらつしやいますか。恐らく、すばらしいお宅で西夏語でも研究しておられるのでしょう。あたったでしょう。序でに、お暇が御座いましたら西夏語の本の事を文求堂へ聞[■]いて下さいませんか。お願い致します（横線は日本語、[■]は書き損じの塗り潰し）。
- (15) 後に、『日本民俗誌大系』第一巻、沖繩、角川書店、一九七四年所収。
- (16) 『天の蛇』、二一五―二一六頁。
- (17) 江原光太著、『えうゐ』創刊号、一九七五年。
- (18) 『大阪外国語大学70年史』 大阪外国語大学70年史刊行会、一九九二年。
- (19) 『天の蛇』、二一六頁。
- (20) 錦見はまは、大正十三年頃に大阪から引越してきたという。「ニコライ・ネフスキーのこと」『かわち野』30、一九九六年。
- (21) すでに『天の蛇』にも掲載されている、一三九頁。二〇〇二年一月・七月に実見。
- (22) エリ・グロムコフスカヤ編、一九七二年、魚井一由訳、北海道出版企画センター、一九九一年。
- (23) 藤本英夫『金田一京助』、新潮社、一九九一年。
- (24) 同上。
- (25) 『天の蛇』、一三九頁。
- (26) コボアスは、ネフスキーが小樽時代の一九二一年にユーカラ（愚かな若者）「人間の始祖神」などを筆録した人であるが、すでに老齢に達していたことなどから見合させたものと思われる。ネフスキーにとってアイヌ研究は、宮古島研究・西夏語研究とともに欠くことのできないものであり、帰国後もこの研究を続行し、一九三五年には論文「アイヌの民間伝承」を発表している。これは遺稿資料をまとめて編纂された『アイヌ・フォークロア』（前掲、注22）の序文にあたる。
- (27) この年の出来事としては、十一月に金（千円）の紛失事件があり、十二

月には東京に赴いたことが外務省外交史料館蔵の秘密文書に記されている、松山真一「ネフスキーのもうひとりの娘を探して」長縄光男・沢田和彦編『異郷に生きる 来日ロシア人の足跡』成文社、二〇〇一年。

(28) 『天の蛇』、二一五頁。

(29) 『桃太郎の母』法政大学出版局、一九五六年の「はしがき」、後に講談社、名著シリーズ・学術文庫、『石田英一郎全集』筑摩書房に所収。「はしがき」は後に加筆し「ネフスキー先生の思い出」として『人間を求めて』筑摩書房、一九六八年に掲載（前出の全集に所収）。

(30) 『天の蛇』、二一七～二一八頁。

(31) これらの論文は『月と不死』に収められている。前掲、注11。

(32) 『天と蛇』、一七九頁。

(33) 同上、二一六頁。

(34) 緒言はいずれも「佐山融吉 識」とあり、2の二冊は大正三年と大正六年、3は大正七年、4は大正二年発行。ここには記されていないが、大正四年発行のものは「曹族阿里山社、同皿社著 同筒仔霧著」となっている。

(35) 『天の蛇』、二二二頁。

(36) 今回の閲覧では確認できなかったが、文面は『天の蛇』一二三頁に掲載されており、転載しておく。

謹啓 貴方には御変りなく御機嫌御よろしくゐらせられる御事と存じます。また奥様もお変わりありませんことと存じます。あまり御無沙汰致して居るものですから、何から申上げてよろしいかわかりません。いつかの東京日日新聞で拝読いたしますと、あなたは英文で御著書をなさいました由うけたまはり甚だ喜びて居りました。続々と御研究の御発表と存じます。羨ましく存じます。どうも外国のお方は世界的でよろしいと思います。日本人はさうは行きませぬ、語学がヘタですから。

次に私の蒐集物の小さな報告書「老嫗夜譚」を岡村君「岡村千秋」加藤氏加筆の方からお届になりましたことと存じますが、若しはまだ見て下さらなかつたら一冊呈上いたしたいと存じます。相変らずつまらぬもので恥かしいものですが、あなたが私の村に御出でになった記念としてで御座います。

先は右御伺ひまで申上げます。奥様へ御よろしく御申伝へして下さいませ。私の山の神からも呉々御よろしくと申上げ居ります。

(37) 『柳田国男集』第十二巻、筑摩書房、一九六三年。

『ピプリア』第三三、三四号、一九六六年。のち、『月と不死』所収（前掲注11）。

(38) 江原、前掲、注17。

(39) 『西夏語研究の話』『東洋学の話』創元社、一九四三年。

(40) この絵はがきと同じものが、伊波普成（昭和四年六月二十六日付）や折口信夫（昭和四年七月二日付）などに送られている、『伊波普成 人と思想』（平凡社、一九七六年）の巻頭図版の中にこの絵はがき一枚が掲載されている。折口への文面は、『伊波普成全集』第十巻（前掲注7）所収。

(41) 『天の蛇』、一八一頁。

〔追記〕

初校の校正中、東大阪市市史料課の木村良子さんから、東大阪市立縄手北中学校の笠本光雄教諭が松山真一さんから受けられた情報として、以下のご教示を得た。

松山さんは大阪府警察本部外事課で、瓢箪山付近でのネフスキーの住所、大正十二年十月十六日現在、大阪府中河内郡枚岡南村大字河内三五二、大正十三年三月十七日には、大阪府中河内郡枚岡南村大字河内一一一三より、大阪市東成区へ転居

を確認されたとのことであった。

1は「中村別荘」、2はその後に移転した「近くの新しい洋館」の所在地と考えられる。1の「大字河内」と史料Bの「字客坊」の相違については、枚岡南村が旧の喜里川・五条・客坊を合わせた「河内村」と四条・六万寺・横小路の各村が合併して成立しており、住所表示はこの時の「河内村」の範囲を「大字河内」として、資料Bはさらにその一地域「旧の客坊村の範囲」を通称「字客坊」としていたと考えられ、異表記であるが同一場所と考えて差し支えあるまい。詳細については後日に期したいと思う。

三氏に対し、感謝いたします。